福岡・元岡（もとおか）・桑原（くわばら）遺跡

1　所在地　福岡市西区大字桑原字戸山

2　調査期間　第二〇次調査　二〇〇〇年（平12）四月～継続中

3　発掘機関　福岡市教育委員会

4　調査担当者　菅波正人

5　遺跡の種類　集落跡・官衙関連遺跡

6　遺跡の年代　古墳時代～平安時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

遺跡は福岡市の西端、糸島半島東側の山間部にある。この付近は標高一〇〇m以下の低丘陵で、小河川によって樹枝状に侵食されている。本遺跡は九州大学統合移転に伴い、一九九七年から発掘調査を行なっており、これまで第七次調査で「壬辰年」の紀年銘木簡、第一五次調査で「祓」に関わる木簡などが出土している（本誌第二一・二二号）。本調査地点はそれらの木簡が出土した地点から約一km東の丘陵端から谷部に位置する。

（前　原）

遺構は、古墳時代後期から古代の遺物を含む整地層上面で検出した。奈良時代から平安時代にかけてのものと推測され、二間×二間の総柱建物一三棟、二間×三間の側柱建物四棟（いずれも掘立柱建物）などが検出された。二間×二間の建物は床面積約一〇～一四㎡と小型で、東西三〇m南北三〇mの範囲に概ね柱筋をそろえて配置される。調査区東側では池状遺構〇〇一を検出した。池状遺構は谷を幅約三m長さ約一四mの築堤により堰きとめたもので、長さ約三五m幅約二〇m深さ約五〇～八〇cmを測る。

池状遺構からは土器類（須恵器・土師器）、木製品（木簡・丸木弓・容器・糸車など）、銅製品（鋺・飾金具など）、鉄製品（刀子・鏃など）が多量に出土した。木製品には舟形木製品や斎串などの祭祀具があり、この場所で何らかの祭祀が行なわれていたと推測される。池状遺構は九世紀には埋没しており、機能していた時期は七世紀末から八世紀末頃と考えられる。このほか、整地層の下層には古墳時代後期の竪穴住居などが多数存在している。遺跡の性格は今後の調査にもよるが、遺構・遺物の様相から何らかの官衙施設と考えられる。

木簡は池状遺構及びその流出部より出土した（現在三四点）。また、墨書土器は現在五〇点余りを確認している（「案主」「依」「乙猪」「嶋足」「鞍手」「常石田」など）。このほか、円面硯・銅製帯金具（丸鞆・巡方）・銅製権衡なども出土した。遺物は整理中であり、ここでは

文字が判読できる主な木簡を紹介する。

8　木簡の釈文・内容

(1)
・□壱□□〔者カ〕□　(87)×18×2　019

(2)
・□□
□部□□　□□
・難波部十人人
□□部〔大伴カ〕　額田部□
・□帳〔計カ〕造書□□用仍□〔具カ〕□〔中カ〕
延暦四年六月廿四日□　(157)×(30)×3　081

(3)
・「嶋郡赤敷里□〔侍カ〕難波マ□〔首カ〕
・「■□□〔廿カ〕三□丁□〔卯カ〕□□□　(161)×14×4　019

(4)
「久米マ□〔古カ〕手」　248×23×4　051

(5)
・「〈太宝元年辛丑十二月廿二日
□□□□鮑廿四連代税
官川内□□黒毛馬胸□〔白カ〕」
・「〈　六人マ□〔持カ〕」　137×27×5　032

(6)
□　□〔建カ〕マ根足」　(87)×18×2　019

(7)
「〈南無千手陀羅□〔尼カ〕
庵□〔婆カ〕娑羅□□
□□裟婆訶　」　150×64×4　032

(8)
道寨」　(171)×19×4　051

(9)
・□□□出□〔挙カ〕給□□□大□　□□□□
・「□
□□□　(963)×(31)×10　081

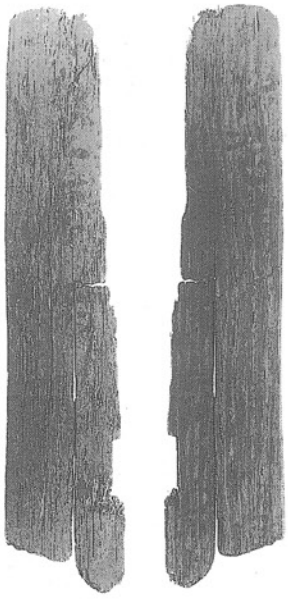
(10)
・「〈難波部□□□」
・「〈□□□□□□」　128×14×6　032

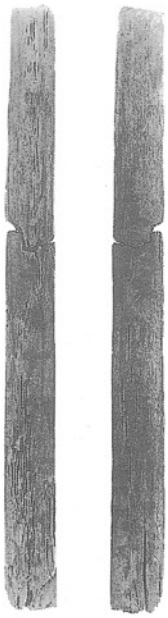
(11)
久米マ大□〔神カ〕マ□　(125)×17×4　081

(12)
・□百□〔十カ〕□
□己西マ田麻呂西□□□
・□□□□□□□□　(118)×(25)×5　081

(13) 多加　(85)×19×3　051

(14) ・「献上　□□…　」
・「□□　…延暦四年十月十四日真成」　(165+113)×(29)×5　081


(1)

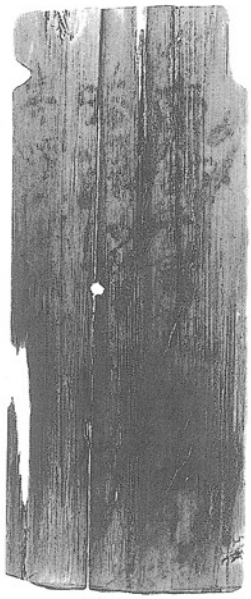

(3)

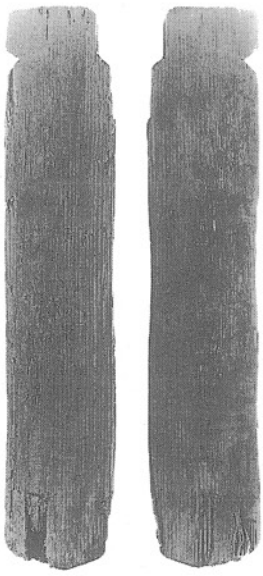
(14)表上半

(15) 志中臣マ刀良　(154)×21×8　081

(16) □例可□従人志麻」　(97)×21×3　019

(1)は上・下端と左辺が欠損している。計帳作成に関わるものと考


(7)


(5)

(14)裏下半

えられる。

(2)は上・下端、左右辺いずれも欠損している。

(3)は下端が欠損している。左辺は二次的整形。「嶋郡赤敷里」は『和名類聚抄』所載の筑前国志麻郡内の七郷の一つ「明敷」をさすものと考えられる。

(4)は上端の一部を欠くが、ほぼ完形。

(5)は上端の一部を欠くが、ほぼ完形の荷札木簡。表側は三行にわたる。一行目の「太宝元年辛丑」(七〇一)の年紀は干支との併用で、大宝令施行直後の状況を示す資料と言えよう。二行目の「鮑廿四連代税」が木簡を付けた品物を示していると考えられる。

三行目の「川内□」は人名、「黒毛馬胸□」は運搬に使用した馬の特徴を示すものであろうか。なお、(3)~(5)の「部」の異体字は「ア」の字体を用いている。

(6)は上端を欠損、下端は切断のままの原形を保つ。

(7)は池状遺構の上層での出土であり、九世紀以降に下る可能性がある。ほぼ完形品の幅広の木簡で、文字は三行にわたる。中央付近に穿孔が見られる。

(8)は上端を欠く。祓に関わるものか。

(9)は下端と右辺を欠くが、九〇cmを超える長大な木簡である。片面は横材として利用している。判読しづらいが、人偏の文字の習書とも考えられる。もう一方も遺存状況は悪い。出挙に関わるものか。

(10)は完形品。不明瞭ながら「難波部」の氏名が判読できる。

(11)~(13)は上・下端が欠損する。(12)の「部」の異体字の字体は「ア」。

(14)は二片に折損している。同一個体で、接続する可能性もある。上端は丸く仕上げられる。表側は上端近くに「献上」と記され、やや下がったところに文字が見られるが判読できない。裏側は下方に「延暦四年十月十四日真成」と年紀と人名を記している。

(15)は上・下端が欠損している。「中臣部刀良」の上の「志」は嶋郡内の七郷のひとつ、「登志」を指す可能性もある。

(16)は上端が欠損している。

今回出土した木簡には年紀を記したもの(大宝元年・延暦四年)のほか、ウヂ名(難波部・久米部・額田部・建部・己西部など)を記したものが見られる。用途は付札や文書などが考えられるが、内容が不明のものが多い。

なお、木簡の釈読にあたっては、京都学園大学の八木充氏、京都橘女子大学の狩野久氏、九州大学の坂上康俊氏、奈良女子大学の舘野和己氏、東洋大学の森公章氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏・吉川聡・馬場基各氏をはじめとする多くの方々からご教示を得た。

9　関係文献

福岡市教育委員会「九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報一―元岡・桑原遺跡群発掘調査―」(『福岡市埋蔵文化財調査報告書』六九三　二〇〇一年)

(菅波正人)